

## エマスンとその群 (一)

——ラルフ・ウォルドー・エマスン——

尾 形 敏 彦

一

超絶主義思想 (Transcendentalism) の定義づけをするというようなつもりはないが、これは、要するに、個人の能力と自己信頼の精神を最高に評価する一種の理想主義であって、当時の平凡な自主独立的アメリカ人——小売商人や西部開拓者など——の精神と共通するものであった。しかし、この人びとが超絶主義者であるというのではない。超絶主義者と称したのは、ボストンを中心にする知識階級の人びとのなかで、とくに改革的な一部の理想主義者たちをさして言うのである。

超絶主義という名称は、直接の關係はもたないにしても、カント (Immanuel Kant) 哲学の、善とか、自由とかいう指導原理を知るためには、宇宙との超絶的合一が必要であるという考え方に無關係ではない。しかし、ニュー・イングランドの超絶主義思想は、現実に夢をもつことができた当時のアメリカ社会という土壤に生まれたものであったために、厳肅なカント哲学とはまったく無關係で、きわめて楽天的な思想であった。比較するならば、エマスンの思想にニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) の思想をもつてするのがもっとも適切であろう。

すなわち、エマソンの大霊という考え方と自己信頼の精神をニーチェの超人思想に比較するほうがカント哲学と比較するよりも適切である。たとえば、エマソンのキリスト教攻撃も、ツアラトゥストラ (Zarathustra) によるニーチェのキリスト教攻撃も共通点をもっていることができるからである。また、両者ともアフォリズムという表現形式を好んだことも類似点である。さらに興味深いのは、ニーチェの友人であり、ニーチェと同じ古典文献学者で、ギリシア文学と宗教詩の研究者であるローデ (Erwin Rohde 1845-98) が『善悪の彼岸——未来の哲学への序曲』 *Jenseits von Gut und Böse: Vorspiel einer Philosophie der Zukunft* (1886) を痛烈に批判して「この中に書かれた哲学的な部分は貧弱で、ほとんど見戯にひとしい。政治的な面はばかっているし、世間知らずだ。……ただ人真似をし、寄せあつめの仕事をしているこの精神の不毛さ<sup>①</sup>」といった言葉は、かなりの程度まで、エマソンにもそのままあてはまる。そして、両者の場合とも、かれらの天分を理解しないときに、この言葉は一層よくあてはまるように思われる。事実、ニーチェはエマソンの影響をうけているが、当時のアメリカ社会とは対照的に暗い地盤に生まれたものであったから、ニーチェには楽天的なところはまったく見られない。ドミニカス・パイク (Dominicus Pike)<sup>②</sup> やナッティ・バンポー (Gatty Bumpo)<sup>③</sup> のほうがニュー・イングランドの超絶主義者に近いだろう。超絶主義思想は当時の人間感情を無視した産業主義にたいする人間性回復を目的とする道徳的反動であり、超絶主義者の文学は西部開拓運動と産業革命を母体とするいわゆるアメリカ・ルネッサンス文学の重要な一翼をになっているという意見はすでに定説である。

超絶主義思想の中心にある考え方は、個人の心の奥には神が存在し、各人はそれぞれ宇宙の中心点で、自然は神意の反映だというものである。そのために、自己信頼の精神と自然尊重がもつとも重視されたのは当然のことである。この一種の思想運動の中心人物がエマソンであり、かれは各種の思想を涉猟して、ヨーロッパの浪漫主

義思想にたいしてのみならず、東洋思想にたいしても一時的にはかなり共鳴した。しかし、かれは無差別に各種の思想をとり入れたわけではなく、自己信頼という基盤に立って取捨選択し、いわば、エマソン思想とでもいうものをつくろうとしたのであった。かれが各種の思想を涉獵したということもニーチェの場合に類似していると言つてよいであろう。両者とも同じような浪漫的性格の持主であった。ただし、ニーチェのほうは公立プフォルタ学院からボン大学時代にかけて、とくに、かれの性向とは反対の古典文献学へ強く傾斜して精神の平衡をとるという結果になったが、そういうことのなかったエマソンとはこの点が異なるところである。自分の心の声を神の声であると信じたエマソンにとっては、価値のあるものは現在の自分だけであり、過去や未来のいかなるものも現在の自分に無関係ならば価値がなかった。そのため、エマソンの態度には多くの矛盾が見られるのである。このことを裏付けるように、かれ自身は、首尾一貫ということに固執するのを愚かでないことだと軽蔑し、論理の矛盾をすこしも気にしなかった。否、エマソンは、まったく、論理をもたなかったと言つてもよいであろう。エマソンにとって幸運であったことは、かれの考え方の基礎になっている二つの確信、すなわち、個人は神性をもつという確信と重要なものは良心と本能と靈感だけであるという確信とを、ほとんど生涯にわたつて失わないですんだということである。このことは、換言すれば、エマソンが活躍した時期がアメリカの浪漫主義時代と一致していて、南北戦争の真の意味が理解されはじめた頃には、かれの活躍期はおわつていたということである。

## (注)

① 世界の名著第四十六卷『ニーチェ』参照。

④ Nathaniel Hawthorne: "Mr. Higginbotham's Catastrophe," *Twice-Told Tales* の主人公。

⑤ James Fenimore Cooper: *Leatherstocking Tales* の主人公。

二

ニーチェの場合ほどではないが、エマソンの場合にも、エマソンその人とかれの作品を切り離して理解しようとすることは不適當である。かれの作品には、それほどかれの色彩が濃く影をおとしているからである。ただし、作品そのものが直接にエマソンをあらわしているというのではなくて、両者の間には相當の距離があるということとを念頭におかなければならない。かれの作品は、ほとんど、すべての素材を日記から得て、それを自由に変化させて表現したものだと言えるからである。そのために、われわれは作品から日記へと立ち帰ることが必要になるのである。

かれの生涯は、一八三三年九月にヨーロッパから帰国するまでの約三十年間を第一期、それから、『隨筆集・下巻』*Essays, Second Series* 出版の一八四四年までの約十二年間近くを第二期、それから、南北戦争勃発の一八六一年までの約十五年間を第三期、それから、一八八二年の没年までの約二十年間あまりを第四期とわけることができる。第一期はエマソンの思想の胎動期、第二期はその確立期であって、この期間に『自然論』*Nature* (1836)、『アメリカの学者』*The American Scholar* (1837)、『神学部講演』*An Address* (1838)、『隨筆集上・下巻』*Essays, First (1841) and Second (1844) Series* とごうアメリカ・ルネッサンスを代表するにふさわしい作品が含まれている。第三期には『詩集』*Poems* (1846)、『代表偉人論』*Representative Men* (1850)、『英国印象記』*English Traits* (1856)、『処生論』*Conduct of Life* (1860) などという円熟記の傑作が書かれている。第四期には『詩集五

月祭』*May Day and Other Pieces* (1867), 『社会と孤独』*Society and Solitude* (1870), 『文学と社会の目的』*Letters and Social Aims* (1875) など、かれの晩年を物語る作品が書かれている。

ユニテリアン派の牧師である父ウィリアム (William Emerson 1769-1811) が比較的早世したので、下宿屋をしながら生活を支えた遺族が相当の生活苦を味わったことは各種の伝記のつたえる通りであろうが、エマソンがボストン・ラテン・スクールからハーヴァード大学へすすんだことは、当時が教育熱心な時代であり、さらに、かれが苦学生であったことを計算に入れてみても、大学進学者数のすくない当時としては、ことさら、エマソンの少年時代の経済的環境が悪かったことを強調するのは不当であろう。一八二一年に大学を卒業してからは、兄ウィリアム (William Emerson 1801-68) の女子塾で教鞭をとりながら、牧師になる準備をすすめていた。このことも、少年時代から宗教的環境に育ったかれとしては、別に不思議なことではない。ただ、この進路が平凡に開けて、エスマンが標準的な一牧師として生涯をおわるということにならなかった点に興味がある。

一八二三年十二月五日に女子塾をエマソンにまかせて、ヨーロッパに向かって出発した兄ウィリアムは翌年三月からゲッチェンゲン大学に学び、アイヒホルン (Johann Gottfried Eichhorn) の高教会主義の歴史的、科学的聖書研究 (higher criticism of the Bible) に強く影響されたばかりでなく、その秋にゲーテを訪ねたとき、<sup>①</sup>短時間の面会ではあったが、激しく心を動かされ、牧師になることをやめて法律研究をはじめようと決心して翌年帰国してしまった。<sup>②</sup>この兄ウィリアムを通して、ドイツ懷疑派神学の影響をうけたエマソンは、神の存在を否定するような考え方に襲われ、ドイツ無神論はキリスト教の根底を揺り動かさそうとしているようだといふニューリタニズムを信じるメアリー・ムーディに熱心に聞かせた。この頃のエマソンは、将来の方向はきまっていたが、まだ、自分の思想の基盤さえも出来ていないような状態で、自信がなく、きわめて容易に影響をうけやすかった。たとえば、

日記にも、「子供の頃の夢はすべて色あせてゆく。それにくらべて、自分の才能と境遇のみじめな凡庸さが、いやに不愉快に反省される。それに、今の自分の能力では、たとえ、どれほど勉強し、犠牲をはらっても、あの子供時代に自分の胸に抱いていた多くの期待が決して夢ではなかったことを証拠だてることができるとは考えられない」と書き、さらに、「自分の推理力は弱いからバトラー (Joseph Butler) の『対比論』やコーーム (David Hume) の『論文』のようなものとはとも書けそうにない。こんな告白をしながら、自分が永遠にわたっての『論争地』である神学を選ぶというのは不思議なようだが、しかし、そうではない。なぜなら、神に関する問題についてのもっとも高級な推理力は、たとえば、ロック (John Locke) やクラーク (Samuel Clarke) やヒュームたちのような『推理の機械』どもの成果であるよりは、むしろ一種の道德的想像力の成果だからである。……今日、もっとも流行している説教の成功、不成功は、主として想像力の有無にかかっているのであって、そういう説教に必要な教養ならば、自分にも修得できないことはないようだ」と書いたりして、まだ自信のないことを示している。しかし、信心堅固なメアリー・ムーディはこれを聞かされると、ピューリタニズムの立場からドイツ無神論を激しく反撃し、動揺しているエマソンに強い衝撃を与えた。さらに、その頃、エマソンはニュートン (Newton) にある伯父ラッド (Ladd) の農場へ手伝いに行ったが、そのとき、誠実なメソジスト派の信者タルボックス (Mr. Tarbox) という農場労働者の「たえまなく祈れ」という言葉に強く動かされたりして、精神的危機を脱出することができた。このときの影響の強かったことは、一八二六年にウォルサム (Waltham) で行なわれたエマソンの処女説教が「たえまなく祈れ」*Pray without Ceasing* という題をもっていたことから想像される。それから、W. E. チャニングの影響を受け、さらに、スウェーデンボルグ主義者であるリード (Sampson Reed) の『精神の成長記』*Observations on the Growth of the Mind* を読んで感激し、精神は歴史を超越して直接に神と交

涉できるといふ確信を抱くにいたった。一八二五年にハーヴァード大学神学部に入學したが、ノートン教授の講義を中心にする大学での研究はエマソンにあまり影響を与えなかったようである。その頃の日記に、かれの思想の中心に位置する「報償論」の萌芽のようなものを書いてある。「すべての物事は相反する二つのことから成り立っているとソロモンは言った。われわれの知っている全体というものは、相償うものの組織体なのだ。ある形式であられる欠点は、かならず別の形式で償われる。どんな苦悩も報いられ、どんな犠牲も償われ、どんな負債も支払われる。」<sup>⑥</sup>かれは一八二六年十月十日に説教者の資格を与えられたが、肺結核のうたがいで、十一月末に約半年間の南部保養旅行に出かけた。この旅行中に、かれはボナバルト・ナポレオンの血につながるミュラ(Achille Murat) 夫妻と親しくなり、ミュラの説く無神論がエマソンに反対に作用して、かれの信仰心をより堅固なものにしたといふエピソードがある。エマソンは日記に「わたしの静かな人生に新しい事件が加えられた。ある人(私注|||ミュラのこと)と友人になった。わたしは真理を愛するから元気でいられるのだが、かれも真理愛に燃えている。しかも、かれの精神は探求方面が多いという点でわたしの精神よりもすぐれている。さらに、かれは、家柄のよさ、世界無比と言える実社会における縁故関係でそのすぐれた精神に磨きをかけ、わたしなどが不得意とする『行動』への原動力にしている。ところが、かれは、わたしから見れば、空想をもてあそぶ無神論者の立場に立っている。そのうえ、かれは、實在も、靈魂不滅も信じていない。これらの点においては、わたしの信仰心は堅固で、破壊されるようなことはないと確信している。それはとにかくとして、わたしはこの大胆な懷疑家を愛し、尊敬している。かれの靈魂は高貴であり、かれの道德的態度はサドカイ教徒の態度のよう<sup>⑦</sup>で、崇高である」と書いた。これより十日ほど後の日記には重大なことが書きとどめられている。すなわち、「世間でいう栄光などはどうでもよい。精神は精神自身の栄光をもっている。精神の行為は永続的である。複數

の主人には誰もつかえることができない。世間的な偉大さと靈魂の偉大さのいずれかを選んで、他方もうまくいくようにと希望することはできない。今夜は靑空のもとで、星が嚴肅な感化力をわたしにふりそいでいる。わたしは一人で、くだらない社交の快樂などからは得られない歓喜を感じている。今の瞬間のわたしの心境は特別なもので、まったく新しいものなのかも知れない。この瞬間の感動は道德的実在があるかぎり、他に類例のない永遠に特別なものなのかも知れない。こんなことを考えることは楽しいものだ。わたしは新しい生活にはいるのだ。わたしは精神世界で、今まで借りる人のなかった新しい土地を手にいれるのだ。わたしの新しい思想と感情の道は、はるかに、見えないほど無限にのびている。前方には見なれない思想が、天使のように舞いながらわたしを手招きしている。たしかに、わたしは神への大道を歩いているのだ」と書いた。このときに、自分が神への道を歩いているのだという確信をかれは抱いたのであった。同時に、このことは、エマソン自身が意識しなかったにしても、この時点において、かれは歴史的キリスト教に訣別したということを物語っている。

健康を回復して、エマソンはハーヴァード大学神学部に通学すると、研究と並行して、牧師補として、説教に努力し、一八二九年には正式にポストン第二教会牧師に任命され、エレン・タッカー (Ellen Tucker) という病弱な女性と結婚した。そして、牧師としてのエマソンは、一応、自信をもって説教することができた。たとえば、「宗教には、かならず、崇高さがともなうのではなからうか。礼拝堂へおりてゆくと、数人の平凡な人びとがいるが、あの人びとは、飲食のためや、金もうけのためや、娯楽のために集まっているのではなくて、偉大な思想にひかれてくるのである。広大無辺の『神』と關係をもち、一体になろうとして、そこへくるのである」と書いている。この頃、自分の心のなかに神が存在するという信念をかれはもちはじめ、さらに、精神と物質とは相互に対応するという考え方 (correspondence) をもち、真理を直観的に把握できると感じ、精神は神の直接の啓示で

あると信じるに至った。直観の權威を認めたエマソンは、聖書を神の最終的な言葉であるという信仰と歴史的キリスト教の神にたいする信仰とを完全にすてきって、いまだ莫然とはしていたが、独特の神を考えたのであった。かれのいう神とは一種の普遍的な神であり、神への道を歩もうとする、すなわち、無限の世界にあこがれるエマソンは自分が個人ではなくなり、この普遍的な神にいつかはなれるであろうと想像したから、かれは講演のなかで、とくに、個人の無限性を強調したのである。このことを、数年後には、かれは確信するようになった。すなわち、「自分は、いつかは個人でなくなることを信じている。魂は、たえず『普遍的』になろうとする傾向をもち、有機体の最後のものに至るまで活気を与えようとしているということを信じている」と日記に書いた<sup>⑩</sup>。しかし、神になれる可能性をかれが想像したということについては、当時の浪漫的アメリカ社会という環境が、そういう想像をかれにもたせたのだと言ってもよいほどに、影響力があったと言えよう。かれの日記の多くの頁にみられるように、懐疑的な一側面をもつエマソンが、なにかの行動を起こすまでには、つねに、相当の時間がかかっていたが、かれが心のなかで直接に聞いた神の声を行動によって現実化するまでも、かなり長い時間がかかったが、これは、問題の重大性からみて当然のことであろう。エマソンの考え方ははじめから危険視していたボストン第二教会の前任牧師の想像は、やがて、つぎのように現実化された。一八三一年六月にエマソンは特定の宗教団体に加盟することは不自然であると考え、その秋には礼拝式を不用であるとみなし、牧師職さえも批判するようになった。一八三一年は、かれにとっては、生涯でもっとも苦難にみちた年で、若い妻エレンが病死した年でもあった。そして、翌年二月には牧師職の辞任を考え、エマソンらしく、熟慮を重ねたうえで、いわば、かれとしては、まさに、乾坤一擲の勝負に出たのであった。その頃の日記をみると、この間の事情が明らかになる。たとえば、「自分は、ときどき、立派な牧師になるためには、どうしても、牧師職をやめることが必要だと考え

た。この職業は、もはや時代おくれである。時代が変わっているのに、われわれは祖先の古い形式で礼拝している。ソクラテスの異教のほうが、老衰して使いものにならないキリスト教よりもましなのではあるまいか」と書いたりしている。そして、ホワイト・マウンテンズに出かけて、静かな山中で牧師職の問題を熟慮した。日記に、「ここ、山のなかでは、思想の翼を強くして、愛と知恵のより静かな高みから人びとの誤謬を見なければならぬ。……心にいづく宗教は軽信ではなく、宗教の実行は形式ではない。宗教は生命である。一人の人間の秩序である。……」<sup>④</sup>と書いている。そして、九月にボストンに帰り、ボストン第二教会牧師という名誉ある地位をなげすめたのであった。

それから、エマソンは十二月二十五日にヨーロッパに向けて出発して、自分の思想をためそうとしたのであった。結局は、カーライル以外は、コールリッジやワーズワースをはじめとして、尊敬していた文人たちは、期待したほどの人物ではなく、エマソンは自分の思想に自信をもつことができた。かれは、「もし、健康と機会が許せば、あらゆる必要な真理はそれ自身が真理の証明であること、神の教理は書物によって証明される必要のないこと、キリスト教の重要な点は道徳的真理という点にあるのだから、キリスト教を教理の体系と見なすことは間違であること、キリスト教は、信仰の法則ではなくて、人生の法則であることを論証する義務がわたしにあるような気がする。ところで、世間の人びとは、なぜ、汗水たらして地面をはいまわり、教理のような無味乾燥な生気のない醜いものをあさるのであろうか。かれらに關係のある真理の神聖な美は、かれらの背後に、控えていてではないか。かれらは、容器のことで大騒ぎをするくせに、それを開いて宝石を見ようとはしない。なんと不思議なことであり、また、可哀そうなことである」とパリの宿舎で日記に書いた。かれのヨーロッパ旅行における最大の収穫は、パリ植物園でうけた靈感であった。これを、つぎのようにかれは日記に書きとどめた。

「この驚くべき生物の行列——霞のような蝶、彫刻のような貝、鳥、獣、魚、昆虫、蛇など、あらゆる場所に、たとえば、有機体の形をまねた岩のなかにも、未発達の状態でひそんでいる成生の原理を、見物してまわると、宇宙は今までよりも、さらに驚くべき謎のように思われてくる。あれほど奇怪な、野蛮な、美しい形のもので、すべて、見物人である人間に内在する属性の表現でないものはない。——さそりと人間の間にさえも、なにか神秘的な関係がある。わたしは自分のなかにむかでがいているのを感じる——南米のわにが、鯉が、鷲が、狐が、いるのを感じる。わたしは不思議な共感に動かされる。」<sup>⑭</sup>以上の時期がエマソンの思想の胎動期である。

一八三三年に帰国してからは、いよいよ自分の思想にたいする確信を深めて、当時のアメリカで流行していた啓蒙運動である公開講座の演壇に進出し、書齋では『自然論』の執筆に力を注いだ。一八三三年の末頃らしいが、日記に「山上の垂訓の福音は、すべて、現象世界を軽蔑する心の発した言葉である」と書き、翌年の日記には、「自分は自分の本能を信頼しよう。なぜならば、理性はいつでもためらいながら本能のあとからついてくるからである」<sup>⑮</sup>と書いた。さらに、その年末には、「魂を高揚せよ。そうすれば、たちまち、魂は正しくなる。心の奥にふれよ。そうすれば、心のなかのものぐさや、けちくさい牛肉ぶとりの傍観者どもは、一つの情緒の權威を認め、これはよい、これを得るためならば、自分のもっているものを全部投げ出しても惜しくはないと言うであろう。魂を高揚せよ。そうすれば、天候のことも、町のこと、自分のことも、一切消えてなくなるだろう。世界そのものさえも、個性を失い、魂と魂の生きる場所である神の御前のほかは、なにひとつ残らないだろう」と書くに至った。かれは、この処女作品のなかでも、キリスト教会を批判して自然の奥に神を求めるようになった理由は、無限を求める気持が強かったからであると書いている。

エマソンにとっては、自然界とは、そこに神があらわれて、多様ななかに統一を示す場所であった。しかし、

かならずしも、自然が全体として神による統一を示しているばかりではなくて、それぞれの各部分が神による統一を示しているのであった。たとえば、かれは、日記に、自然のなかに示される神をつぎのように書いた。「森のなかでは、説教にはあらわれない神が姿を明らかにあらわす。聖堂のようにそびえる落葉松のなかで、ひかげのかずらがはって神を示し、つぐみが歌って神を示し、駒鳥が声をあげて神を示し、……：頭上高く、雲よりも高く、淡い三日月が小さな雲のむれの間を、西へ、ゆっくり動いてゆき、下界では樺の葉が明るく緑色にかがやいて神を示していた。」<sup>④</sup> また、エマソンは無限を求めて、その世界のなかに住むことを望んだから、人間性の善だけを信じ、無限世界には存在しない悪を否定しようとしたのである。そのために、原罪を認めるキリスト教を批判したのであって、エマソンの考え方はピューリタンから見れば背教者の考え方であった。しかし、自由神学であるユニテリアニズムの立場から見れば、あえて、異端者として非難する必要はないはずであった。しかし、実際には、後に、『神学部講演』のなかで行なった教会攻撃の調子が激しすぎたために、ハーヴァード大学のノートン教授 (Andrews Norton) をはじめとするユニテリアンの知識人たちから、エマソン攻撃がはじまった。たとえば、ウェア教授 (Henry Ware Jr.) は『神のパーソナリティ』*The Personality of the Deity* という説教をハーヴァード大学神学部で行なって、エマソンの講演を批判した。また、エマソンと同じ超絶主義者のなかにも、たとえば、ブラウンソン (Orestes Brownson) のように、エマソンの自主独立的な態度には賛意を表しながらも、講演内容を痛烈に批判した人もあった。実際に、エマソンの『神学部講演』はユニテリアンたちだけではなく、超絶主義者たちさえも、賛否両派にわけたのであった。『神学部講演』の直前頃のかれの日記をみると、「自分の現在は暗く、知恵は鈍く、思想は流れず、記憶にも希望にも美しい景色は浮ばず、ただ重苦しい退屈な義務だけが車輪ののって昔交らぬ人生のわだちを動いてゆくだけだが、——それでも自分は人生を信頼する」と書き、<sup>⑤</sup>

かれはつとめて明るい面に目を向けていた。たとえば、「わたしはバイロン卿がきらいだだが、まったく同じ程度に、泣いたり喚いたりするのがきらいだ。わたしは暗く混乱して悲しみ嘆く激しい性質の人たちとは、同情力の度合いがちがっているのだと思う」と書いたりしているが、決して、人生の暗い面を知らないわけではなかった。たとえば、理想世界を書いたかれの作品のなかでの発言とは違って、かれは現世の悪の存在を認めていたのである。かれのほとんどすべての作品からは想像することが困難であるが、かれの日記、とくに青年時代と晩年の日記からは、常識人としてのエマスンのこの態度は容易にうかがえる。そのほか、後にも、たとえば、奴隷制度を悪であると認めたからこそ、かれは、ジョン・ブラウン (John Brown) にも好意をよせたのである。また、実際行動にはうつらなかつたとしても、一八五〇年の逃亡奴隷法については、「この悪法はどのようなことがあっても絶対にまもらない」と日記に書いて、心に誓ったりしたのもその例である。しかし、自然は精神の影であり、現世の悪は、エマスンにとっては、本質的なものではなかつたから、かれは行動にはうつらなかつたのである。

エマスンが、真の牧師になるためには教会を去らなければならぬと結論したのは、神が教会を見すて個人の心のなかに移り住んだと考えたからであつて、この考え方は自分だけに頼るといふ開拓者精神に共通するものである。エマスンにとっては、化石になった教会や礼拝は問題にならなかつた。かれは、あらゆる束縛をしりぞけて、人間の靈魂は神と直接に交渉できると公言した。この考え方は後の円熟期の作品である『処世論』の「礼拝」(Worship) の章においてもくりかえされている。たとえば、「神はその聖堂を人間の心のなかに、教会と宗教の廢墟の上に、建設するのだ」と書き、「もし、神に出合うことがないとすれば、われわれは神を心にもつていないからである」と書いた。このように、人間の心の奥に神が存在して、人間の靈魂と神が直接に交渉するこ

とが可能であるという考え方は、矛盾の多いエマスの考え方のなかで、かれの生涯にわたって変わらない中心的な考え方であった。この考え方は、人間を神と同等のものにまで高めたもので、時間と場所を問わずに、はまだ危険な考え方である。たとえば、同時代のホーソンやメルヴィル (Herman Melville) などはその危険性をはじめからよく認識していた。この人びとにとっては、人間の有限世界と神の無限世界の間にはとびこえられない断層、破ることのできない障壁があった。かれらにとっては、神は祈るべき対象であったが、エマスにとっては、神は内在するものであるから、人間自身が神性をもち、やがては、神は人間と合一することができるものであって、祈りの対象ではありえなかった。そのために、エマスの祈りはかれ自身の意志如何にかかわらず、かれの独白であった。

エマスが人間と神の間の断層を意識していたのは明らかであるが、論理を無価値で無視すべきものであると考えていたかれは、超論理の世界に実在する靈魂を凝視しつづけている間にとびこえていたように見せかけたのであった。すなわち、エマスは断層をとびこえようと積極的に行動したわけではなく、靈魂を凝視しつづけるうちに現実世界は消えさり、断層はとびこえられていたのである。しかし、エマスが苦心して断層をとびこえようとしたのではなくて、空中をわたってしまったのだと思わせたことは、かれの初期の作品と晩年の作品とを比較してみると、いかに強烈な復讐によって報いられたかが明らかである。

(注)

- ① ゲーテは一八二四年九月十九日の日記にボストンからきたゲッチェンゲン大学の研究生でプロテスタントの神学者であるウィリアム・エマスのことを簡単に記入している。

- ⑧ ウィリアム・ヘマンは一八二七年にはニューヨークでドイツ文学の講演者として、多少は有名になっていた。
- ⑨ Emerson: *Journal*, September, 1823.
- ⑩ Joseph Butler (1692-1752) イギリスの高僧で神学者。代表的著作は自然と宗教を比較して論じた『宗教対比論』 *Analogy of Religion* (1736) である。
- ⑪ Emerson: *Journal*, April 18, 1824.
- ⑫ *Ibid.*, Spring, 1826.
- ⑬ The Middlesex Association に提出した説教原稿が審査に合格した。
- ⑭ Emerson: *Journal*, April 6, 1827.
- ⑮ *Ibid.*, April 17, 1827.
- ⑯ *Ibid.*, February 10, 1830.
- ⑰ *Ibid.*, August 21, 1837.
- ⑱ *Ibid.*, June 2, 1832.
- ⑲ *Ibid.*, July 6, 1832.
- ⑳ *Ibid.*, July 10, 1833.
- ㉑ *Ibid.*, July 13, 1833.
- ㉒ *Ibid.*, undated (c. December, 1833.)
- ㉓ *Ibid.*, May 21, 1834.
- ㉔ *Ibid.*, December 29, 1834.
- ㉕ *Ibid.*, May 26, 1838.
- ㉖ *Ibid.*, May 6, 1838.
- ㉗ *Ibid.*, June 21, 1838.

⑳ *Ibid.*, May, 1851.

㉑ Emerson: *Works (The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Centenary Edition, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, The Riverside Press, Cambridge, 1883), vol. VI. The Conduct of Life, "Worship,"* p. 204.

㉒ *Ibid.*, p. 230.

## 三

エマソンがピューリタニズムという基盤のうえに、かれの思想の枠づくりとして、ネオ・プラトニズムを用いたことは、エマソンの思想とネオ・プラトニズムの間にみられるあまりにも多くの類似点から明らかである。とくに、サッカス (Ammonius Saccas) ①の神秘思想がエマソンの共感を得たであろうと思われる。ここで、両者を詳細にわたって比較することは不適當であるから簡単に一べつするにとどめたい。まず、エマソンの思想は一つの混合体であるが、このことは、ネオ・プラトニズムにきわめて類似している。エマソンの言う大霊とはプロティノスの言う語られえない超思想的で超存在的な万物の根源に相当し、絶対善であるト・ヘン (to hen=the One or the Good) に比較することができる。ネオ・プラトニズムでは、ト・ヘンは思考される自己に対立する思考主体である理性ヌース (nous) を想定したときに、自己分裂して、理性の世界をつくり、ヌースは多数のアイデアを産みだして、自分の反映である多数の靈魂プシケ (psyche) をつくり、靈魂はアイデアを原型にして感覚的な自然ピュシス (physis) と質料ヒュレー (hylē) とをつくり、ここに、一即多、多即一の関係が成立したと説明されている。ト・ヘンから放射された最後の極致が無形の非存在であるヒュレーであって、これは神に対立するものと考えられる物質ではない。このヒュレーはエマソンの思想における物質に相当する。エマソンの世界を成立させ

せるためにエマソンは物質を非実在と考えざるを得なかったのである。要するに、ネオ・プラトニズムの流出説(emanatio)を反対にたどったのが、エマソンであって、かれの認識した物質とは非実在であつたから、かれにとっては断層は存在しなかつたのである。ネオ・プラトニズムでは、世界のすべては神の自己思考の必然的結果であつた。この道程を反対にたどれば、最後にはエクスタシー(ekstasis)によって、靈魂は神に復帰できるのであつた。エマソンが靈魂を凝視することを必要だと考えたのはこれに比較できる。エマソンが宇宙を完全な調和と秩序をもつものだと解釈し、すべては大靈の発現であり、一即多、多即一であると考えたのは、かれの思考の枠組をまったくネオ・プラトニズムから借用したからである。しかし、かれは自然にたいして、より高い、ネオ・プラトニズムのヌースに相当する精神の象徴という地位を与えて、人間と大靈の合一のための媒介者にまで高めた。しかし、エマソンの思想が、ネオ・プラトニズムそのままではないことは勿論である。前述のように枠組みの段階で、これを取り入れたので、そこには、日記にみられるエマソン独特の自然についての体験と青年時代に愛読した神秘主義者スウェーデンボルグの精神と物質の間の対応という思想の影響がみられる。さらに、ドイツ浪漫主義思想の自然観の影響も無視できない。悟性にたいする感性、合理主義にたいする非合理主義、形式主義にたいする生命力の重視、冷静な理論よりも文学的情熱にたより、自然を賛美し、自然界に最高精神のあらわれを見るところは両者に共通している。エマソンはドイツ浪漫主義思想の間接的影響をうけているが、かれはいかなる思想をもアメリカ化して独特のものにしようとした。ドイツでは自由精神が政治的圧迫によって内面的理念であるにとどまったのにたいして、特殊な性格をもつ当時のアメリカ社会という自由な雰囲気になかに住むエマソンは、ドイツ浪漫主義思想を實踐可能な理念として、すなわち、道德としてうけとめたのであつた。

形而上学的にとり扱われたドイツ浪漫派の自然にくらべると、エマソンの『自然論』にみられる自然は、その

なかに人間の行為にたいする教訓をもつ典型として実用的にとらえられた自然である。たとえば、エマソンは『自然論』のなかで、第一に自然の効用について述べている。かれの態度には自然にたいする信頼感と自然を利用しようとするプラグマティズムがみられる。これが、エマソン独特の考え方である。それと同時に、理想主義者エマソンにとっては、現象美は、あくまでも、現実世界の背後にある精神を直接に暗示しているものでなければならなかった。そして、この両者を結び合わせるということは、自然美を直観し、それを歌うということであり、そのまま、自然界に内在する神（大霊）にたいして祈りを捧げるということであった。この点にエマソンにおける詩と宗教の一致がみられる。ついでながら、エマソンは、かれ独特の解釈で、詩人を、ただ詩を作るだけの人間ではなくて、自然と語りあうことのできる人間としてとらえた。たとえば、かれは「詩人とは語る人であり、命名する人である。そして、美を代表する人である。詩人は君主であって、中央に位置している。それというのは、世界は彩色されたものではなく、装飾されたものでもなく、当初から美しいものだからである。神がいくらかの美しいものをつくり給うたのではなくて、『美』が宇宙の創造者なのである。それゆえに、詩人は他者の許可をうけてなった主権者ではなく、自分の権利によって王者なのである。……詩人の信任状とは誰も予言しなかったことをはじめて告げるといふことである。……詩人は新事実の唯一の語り手である。なぜならば、かれは自分が描いている光景にたいして、その場において、それに参与しているからである。かれは多くの観念の目撃者であり、必然的なもの、原因となるものの言明者である。わたしがこう言うのは詩的才能をもつ人、または、音律に関して勤勉と技術にすぐれた人のことを言うのではなくて、真の詩人のことを言っているからである」と書いている。

エマソンによると、自然は外面的には雑多な様相を呈しているが、その根本においては精神の象徴であって、

真であり、善であり、美であると考えられている。人間は、自然の一部分であると同時に、自然にたいしては對等の存在であり、詩人であると同時に、道徳家、宗敎家、哲學者、牧師、兵士でなければならぬが、現實の人間はエマソンの理想からは遠く離れたものであることをかれ自身よく知っていた。エマソンの場合に、もっとも問題になるのは、かれの精神世界と現實世界の結びかたである。『自然論』のなかの自然は、現實世界というには、あまりにも善意にみちいて崇高に表現されすぎている。しかし實際には、エマソンは現實世界と理想世界の間には對立が存在しないと考えるほどの樂天家ではなかつた。それは、かれが仮の姿であると言う現實世界に、假象である惡の存在をかれは認めていたからである。しかし、現實と理想との間にはとびこえられない斷層があると信ずることはかれの世界体制を否定することであつた。假象の現實世界では、エマソンは、對立の存在も、惡の存在も否定してはいない。ただ、そこでは、惡を凝視することよりも惡を追放することを計畫するほうが重要だと考えたらしい。そのために、かれは現實世界の惡にたいしても、自己信頼、すなわち、かれ自身の心のなかの神を信頼すれば惡は消えさると主張して、人びとを激励したのである。自己信頼は現實世界が假象であることを悟るための出発点であつて、ここに、かれの道徳的な行動への道が用意されている。そのために、かれを宗敎家というよりも道徳家と呼ぶほうが適當である。

いわば、ヨーロッパの自由思想とアメリカの行動主義とを結んだものと言えるエマソンの思想は、あまりにも空靈的ではあるが、当時の社会においては、たしかに、一つの急進思想であつた。ここで、かれの強い自己信頼が利己主義にならなかつたのは、同時にそれが、かれの幼少時代からかれに影響を与えてきたピューリタニズムの倫理のうゑに立てられた自己否定であつたからだと考えるのは正しいであろう。

(注)

① Ammonius Saccas (175-242) かがエジプトで東方の神秘的思考をうけいれたためにネオ・プラトニズムには神秘主義的な色彩が濃  
5。

② Emerson : *Works*, vol. III. *Essays, Second Series*, "The Poet," pp. 7-8.

#### 四

エマソンの自己信頼は、現実世界と神の世界との間を結ぶための原動力であり、かれの楽天主義の中核であった。ここで注意しなければならないのは、エマソンの思想をあまりにも楽天的な思想であると簡単にきめつけることはできないことである。その理由は、かれは、「神との交渉というのは、神の心がわれわれ人間の心のなかに流入してくることである。それは個人という川の水が生命の大海のみち潮の前に退却することである」と書いているが、心の扉を開くと神(大霊)はそのなかに自然に流入してきて心を見たと書いたときの楽天的な態度はエマソンだけのものではなく、当時のアメリカ社会全体がもっていた態度でもあったからである。エマソンはかれ自身を神そのものだとは言わなかったが、神に近いものだという自覚をもっていた。しかし、自分が希望するときに神との交渉を要求することは不可能だということを知っていたから、かれはスペインの諺を引用して、「神は鈴を鳴らさないで、われわれを訪れる」<sup>③</sup>と書いたのである。もし、エマソンの言うように、神(大霊)を迎えるために心の扉を開きさえすればよいのであれば、誰でも楽天主義者になるであろう。もし、この点だけを不当に強調するならば、エマソンの考え方は、『神学部講演』にたいしてアダムズ(John Quincy Adams)がエマソンの思想を当時流行の骨相学や動物磁気などと同じものと攻撃したように、一種の精神療法

になつてしまふように思われる。

エマソンの思想の要点の一つは人間の神性を主張したことであり、有限の人間を無限の人間にかえようとしたことである。論理を超越して直観に頼るかれの考え方を論理的に理解しようとすることは不可能に近いであろう。エマソンの思想は、たとえば、人格を否定する小乗仏教とか、仏教に刺激された宋学を大成して、人間と物を太極の理と気の発現とする朱子学とか、日本仏教の禅宗などに似ている。たしかに、『正法眼蔵』にみられる「仏道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは自己をわするるなり」という考え方はエマソンの考え方に類似しているものであろう。また、神秘主義的ところは、密教である真言・天台の教理に似ていると言ふこともできる。エマソンが人間の神性を主張するためにとつた具体的方法は、第一に、現実世界のすべての対立を解消して統一することであつた。かれは出発点において、「幼稚な精神には、あらゆるものは個別的で、孤立している。やがて、その精神は、いかに二つのものが結びつくかを発見し、それらのなかに一つの同じ性質を認め、それから二つは三つになり、三つは三千になる。このようにして、精神は自分の統一しようという本能に圧倒されて、変則を減らし、地下を走る根を発見して、物を結んでゆくのである。この地下径は反対のものや遠くにあるものを結びつけ、一つの幹から花を咲かせるのである」と考へていた。物とは幻にすぎないで、大霊だけが実在であつたが、エマソンはネオ・プラトニズムが質料ヒュレーを見るのとは違つて、物質そのものを、はるかに強く実感していた。ここにエマソンのアメリカ的性格がみられる。すなわち、「大霊」は物の根源としてのみ直感されるものであるから、物の外形とは幻にすぎないと主張するにもかわらず、かれは幻である物の外形に無関心ではなかつた。しかし、物は、エマソンにとっては、接近しようとするれば遠のいてしまつて、永遠に接近できないものでなければならなかつた。かれは、「星は一種の畏敬の念を呼びおこす。なぜならば、星は

つねにそこにあるが、しかし、到達することができないものであるからだ<sup>⑤</sup>と云って、近づけないことに感謝している。それゆえに、エマソンは物の無限性を示して物を賛美したかったのではないかというような誤解を招くことになるおそれもある。しかし、実は、物が実在しないということを、遠ざかるという表現で示したと考えられる。たとえば、「事実とは自然というものに転化された魂なのだから、偉大である」と日記に書いて、自然は魂であって、物ではないと言っている。このことは処女作品『自然論』のなかでも、くりかえし述べられている。たとえば、「自然界の事実とは、それぞれ、ある精神的事実の象徴であって、自然界に存在する個別の相はある精神的状態と関連して、その精神的状態はそれを説明する絵として、その自然界の相をみることによってのみ認められる……<sup>⑥</sup>。精神界の法則は、ほとんど、顔を鏡にうつすように物質界の法則と一致している。……自然は、つねに、靈魂を物語っている。自然は絶対を暗示している。自然は永遠に存在する結果である。自然はわれわれの背後にある太陽を、つねに、さし示している大いなる影である」というようにかれは述べている。エマソンは、ドイツ観念論哲学におけるア・プリオリの世界を認識する原理である理性の目に凝視されると、有限世界は透明になって、大霊がその奥に姿を現わすと考えた。このエマソンの言う理性の目の凝視とは超論理の神秘的直観である。そして、この瞬間には、エマソンは出発点である自己信頼の域を脱して、すでに、ネオ・プラトニズムのエクスタシーに比較できる陶酔の境地に入っていたと言えるであろう。このとき、かれはすべてを統制する大霊に合一したのであるから、あらゆるものを素材にかえて、自分の世界を完成したわけである。

エマソンは、「わたしは一個の透明な眼球になる。わたしは無である。わたしにはすべてが洞察できる。わたしの内部を普遍者の流れがめぐる。わたしは今や神のかくべからざる一部分である」と語り、「内部から、背後から、光がわれわれを通じて物のうえに落ち、そのために、われわれは自分が無であり、その光がすべてである」<sup>⑦</sup>

と述べている。これらの文章は、エマソンの言う神（大霊）とは充実した心の別名で、かれが大霊と合一したということは自分の心の内部からの声を信じたいうことを物語っている。エマソンは自分の意識を創造主として新体制の世界を作りだそうとしたので、この考え方は、神中心のピューリタン体制にたいして、精神的な人間中心主義の考え方であると言いうことができる。

自然は人間精神の象徴だと考えて、かれは観念的エマソン体制を作ったのであるが、実は、この出発点にかれの敗北の原因がすでにひそんでいた。すなわち、かれが無視した物はかれとは無関係に存在していたのである。かれが自意識にあふれた初期の作品をアメリカ文学の古典にすることができたのは、まったく、当時のアメリカ社会という限らない夢をもった浪漫的社会の一面を代表するためにほかならない。それであるから、後期の作品をみると、観念的エマソン体制はかれが無視した物の攻撃によって崩壊したことがわかる。かれは、「世界は、その細目の全部を学んでも知ることはできない」と言ったにもかかわらず、事実を調査するということをまったくしなかった。その理由は、たとえば、「人間の基礎は物質におかれないで、靈魂におかれていて、……人間は零落した神である」<sup>④</sup>から、物質はエマソン体制の立場からは論ずるに足りないものであったということになるからであった。事実から出発しないで、神から出発して、その進めるところまで進んで逆戻りしたので、実際のところ、エマソンが物を認識した形跡はない。そのために、楽天的に、かれは、神から、ネオ・プラトニズムにおける質料ヒュレーまでの上下運動をしただけの話であった。ここで、エマソンの考え方の問題点を要約すると、それは二つになる。すなわち、神と人間の間の関係と、精神と物質の間の関係という二つの問題である。そして、エマソンは超論理に頼って神との交渉を可能にして第一の問題を解決し、現実の物質世界は精神世界の影であって実在ではないと考えることによって第二の問題を解決したのであった。しかし、この考え方を性急に嘲

笑することはできない。かれは自分の考え方を正しいと信じていたと想像されるし、その考え方の当否は別としても、当時の人びとに勇気を与えて激励するには適切なものであったという点をとりあげれば、その点にエマソンの価値があったと言えるからである。

思想はなんらかの意味で時代精神を示し、その時代のある階級によって支持されたものである。十九世紀前半のアメリカ社会は、まだ確立された体制をもたず、人びとは未来にたいして自由に夢を描くことができた。すなわち、周知のように、産業革命と西部開拓地の存在が無限へのあこがれを人びとに抱かせたのであった。そのため、この時代のアメリカ社会にはイギリスの産業革命時代に見られた悲惨な労働者は存在しなかったが、産業革命が進むにつれて、当然のことながら、同じ傾向があらわれてきた。階級闘争と言えるものはエマソンのどの講演をとりあげても想像できないし、実際にも、ほとんど見られなかった。しかし、工場労働者や零細農民が、なんらの不平不満をもつこともなく、エマソンのように、自分はすべてだというようなことを言うことはできないはずである。この点は社会全体の意識がまだ低かったからだと言えるであろう。ピューリタニズムでは、神がすべてであり、人間とは罪人のことであり、神意がなければ、すべては不可能であり、社会事業とは靈魂救済事業のことであった。それにたいして、エマソンにとっては、人間がすべてであり、自己信頼にあらゆる価値が含まれていた。そのために、かれにとっては不可能ということは存在しなかった。こういう態度をとれるのは指導者階級に限られていたのは勿論のことである。この点、貴族主義者である青年ニーチェがエマソンを尊敬したのは両者の思想と思考法の類似によるためである。しかし、フォームによってものを見ることをはじめたマックス・ウェーバーの言う客観性、機械的处理、分業などを特色とする近代社会では、エマソンの思想は容易にはうけいれられないものである。エマソンの思想は浪漫的な空中樓閣であり、よき時代の夢である。エマソンが現

実を認識できなかったことは、かれの最大傑作が詩人ホイットマンであると考えることによって明らかになるであろう。エマソンは幼年時代から無意識のうちにピューリタニズムをうえつけられていたが、ホイットマンにはこの種の抑制力がなかった。そのために、現実を認識できなかったエマソンは、『草の葉』第二版におけるエマソンの賞賛状無断掲載事件で、かつてないほど、その楽天主義に強烈な衝撃をうけたのであった。エマソンは自分と同じような人にたいしてでなければ自分の考え方は通用しないものだということを痛感したのである。

このことは、いわゆるアメリカ・ルネッサンス時代が、エマソンが軽視した社会、すなわち、商業資本主義体制から産業資本主義体制へとかわってゆく社会を他の半面としてもっていたということと関係をもっている。このエマソンが軽視した社会体制が、現実には、物による人間の疎外をおしすすめていたのである。しかし、現実を知らない精神主義者らしくみえるエマソンでも、この事実にもまったく気がつかなかったわけではない。たとえば、『アメリカの学者』のなかでも、「人びとは手足を胴体からもぎとられており、かれらが歩きまわる姿は、さながら、生きている怪物のようである。……有能な指であり、首であり、胃であり、肘であるにすぎず、決して、人間ではない。このように、人間は物に、多くの物にかえられている」と分業による理想的人間像の崩壊を指摘している。エマソンはこの動かしがたい現実を假象として軽視して、それを無限者の象徴だと考え、大靈とか、超絶とかいう言葉を愛したのであるから、現代的見地からエマソンをとりあげるならば、かれの道徳尊重の態度、革命意識を人びとにうえつけて無政府主義思想を鼓吹した煽動家であるということ、東洋思想にも関心をもったということ、プラグマティックな態度をとったことなどが注目すべき点になると思われる。たとえば、「過去を忘れよ。君自身の過去の奴隷になるな。君が祈るときに、君が人にものを教えるときに、君があららこちらの公的な場所で語った言葉と矛盾したことを言いはしないかという恐れにわずらわされてはならない」<sup>14</sup>

とか、「自然のなかには固定したものは一つもない。宇宙は流動的であり、浮動的である。永遠不変というのは、ただ程度の問題にすぎない」<sup>⑮</sup>とか、「自然界では、各瞬間がみな新たである。過去はいつも呑みこまれ、忘れさられ、現在だけが神聖である。生命、変遷、活気を与える精神、それ以外に、確実なものはない。いかなる愛情でも、誓約をとって束縛し、さらに高い愛情にはいらぬようにと引きとどめておくことはできない。どれほど荘重な真理でも、明日は新しい思想の光に照らされて、つまらないものになってしまふ」<sup>⑯</sup>というような文章に、エマソンの特色がよくあらわれている。そして、これは、換言すれば、エマソンが歴史意識をもたなかったというところである。

(注)

- ① Emerson: *Works*, vol. II, *Essays, First Series*, p. 281.
- ② *Ibid.*, p. 271.
- ③ 岩波書店・日本文学大系『正法眼蔵』現成公按一〇二頁。
- ④ Emerson: *Works*, vol. I, "The American Scholar," p. 85.
- ⑤ *Ibid.*, vol. I, "Nature," p. 7.
- ⑥ Emerson: *Journal*, June 12, 1838.
- ⑦ Emerson: *Works*, vol. I, "Nature," p. 26.
- ⑧ *Ibid.*, p. 32.
- ⑨ *Ibid.*, p. 61.
- ⑩ *Ibid.*, p. 10.
- ⑪ *Ibid.*, vol. II, *Essays, First Series*, "The Over-Soul," p. 270.

- ⑳ Emerson : *Journal*, October 28, 1839.  
 ㉑ Emerson : *Works*, vol. I, "Nature," p. 70.  
 ㉒ *Ibid.*, p. 71.  
 ㉓ *Ibid.*, vol. I, "The American Scholar," p. 83.  
 ㉔ Emerson : *Journal*, June 19, 1838.  
 ㉕ Emerson : *Works*, vol. II, *Essays, First Series*, "Circles," p. 302.  
 ㉖ *Ibid.*, pp. 319-20.

五

エマソンは無限をあこがれる理想世界と有限にとどまる現実世界という二つの世界を認めていたが、この二つの世界が妥協できないものだとして判断したために、象徴を重視して、かれの世界体制から現実世界を切り捨てたのである。しかし、現実世界を仮象であるとしても、これを無視してしまうことができなかつたところにかれの矛盾が見られる。エマソンは現実世界に見られる対立を認めたままで、これらを解消しようとした。そして、具体的に、道徳重視という線をうち出したのであった。かれが精神世界だけを実在と認めたことは、たとえば、『随筆集下巻』の「名目論者と現実論者」(“Nominalist and Realist”)のなかでは、二つのものを対立させながら、個別、相対、多を見るものと、普遍、絶対、一を見るものの二つであるが——精神主義者の立場でエマソンの意見を展開していること<sup>①</sup>、あるいはまた、『随筆集上巻』の「円環論」(“Circles”)で、「自然におわりはない。すべて、おわりははじめである。真昼のうちに、別の夜明けがつけねにはじまっている。……しかし、万物があらずかっているこの不断の運動と進歩とは、もし、靈魂のなかにある不動とか安定とかの原理に比較されるのであれば、決して、われわれには感得されなかつたであろう。円環が永遠に生産しつづける間も、永遠の生産者は

不動である。その中心生命は、ある程度まで、創造より優位にあり、知識や思想よりも上位にあって、すべての「円環を含んでいる」と書いて、かれの一元論の立場を強調していることを見れば明らかである。エマソンのこの一元論によると、宇宙は完全な調和と秩序をもっていて、この世のなかには偶然は全然存在しないことになり、この世は美しい必然の世界ということになる。かれが説く報償の精神も宇宙の調和と秩序を説明するものにはほかならない。そして、この調和と秩序とは神の摂理と同じものである。しかし、かれの意見を、かれが切り捨てた現実社会にあてはめてみると、精神的に差別を解消するという程度の効果をもっているにすぎない。

エマソンは自己信頼の強さの程度に応じて、生活、宗教、教育、交際、財産などすべてのことに革命を起こすことができるかと考え、その反対に、意志薄弱によって、不平不満が生じてくると考えた。たとえば、この自己信頼の教えに感激した一例は、「……………『爾自らを信ぜよ』……………これが即ち、爾が新しき国にありて、古るき国の古るき善をとりて、古るき悪を棄て、以て新理想の新共和国を建設するを得る所以、斯く彼は教えたり」と書いた北村透谷であろう。透谷は、とくに、ここで言う第二期のエマソンの作品に心酔したと考えられる。

つぎに、エマソンの言う自分自身とは、相対的な個人ではなくて、万人共通の絶対的な個人である。エマソンは絶対世界の存在だけを信じたのであるから、かれが、信条とは知性の病氣であり、祈りとは意志の病氣、迷える羊は存在するはずがないなどと言っても、それはかれが高慢だという証拠にはならない。高慢とは相対の世界にだけ存在するものだからである。エマソンは、日記からみると、作品から想像されるよりもはるかに謙虚な人である。日記から想像されるエマソンは相当に懐疑的でもある。それであるから、エマソンの自信に溢れた作品は、自分自身にたいする訓戒の言葉であるとみてもよいであろう。しかし、また、かれは自分のエッセイにはコンコードの自然が織りこまれていてと信じていたが、たしかに、かれのエッセイはかれの日常生活と切りはなせ

ない関係をもっている。エマソンは日記に、「自分の思想は、すべて、森の住人である。自分のもつ夢想には、必ずと言っていいほど、松の木の息吹きがかかり、その影がさしている。とすれば、自分はささやかな自分の本を『森の本』と呼んではいけないだろうか」などと書いている。エマソンは、『アメリカの学者』にも書かれてるように、書齋で研究する観念的な人びとのもつ知恵よりも自然のなかで素朴に生きる人びとのもつ知恵を愛する人であった。すなわち、哲学者というよりも愛知者であり、思想体系というものを重視しなかった。かれはプラトン思想、ネオ・プラトニズム、東洋経典、ドイツ観念論、ピューリタニズムなどから適当だと思われる思想を選び出して、直観によってまとめたのである。そのために、作品のなかに、強い個性はあらわれているが、論理的な一貫性がないということのエマソン自身もつともよく知っていた。しかし、かれはこれを欠点だとは思わず、こういうまぜあわせの思想こそ、生きた知恵であると考えていた。

エマソンは理想主義者であると同時に現実主義者、神秘思想家であるとともにヤンキー、個別を指向して多を認める西洋主義者であるとともに統一を指向して一を説く東洋主義者であった。かれは相反する両端を同時にもっていた。かれは自己信頼を教えながら、同時に、自己不信を感じ、現実世界を幻影だと考えながらも実際には尊重し、自由を賞賛しながらも運命に忍従していた。しかし、かれは人生を悲劇だとは考えなかった。そう考えることは勇気を失わせることであり、勇気がなければ真に生きることができないとエマソンは考えていた。そのため、かれは自己批判ということには無縁であった。しかし、エマソンが明るい理想世界を期待したのに反して、現実社会は次第に暗くなってゆき、南北戦争頃までに、物による人間の疎外という事態が目立って進行しはじめたのであった。

(注)

- ① Cf. Emerson : *Works*, vol. III. *Essays, Second Series*, "Nominalist and Realist," pp. 225-48.
- ② *Ibid.*, vol. II. *Essays, First Series*, "Circles," p. 301.
- ③ *Ibid.*, p. 318.
- ④ 北村透谷『エマソン』(原文のまま)。とくに明治、大正時代に、エマソンの「自己信頼論」に傾倒したわが国の文人の数は相当数にのぼる。
- ⑤ Emerson : *Journal*, January 31, 1841.

[未完]